

欣勝寺大蛇の縁起（三田市桑原）

国鉄三田駅から歩いて約十五分の桑原（くわばら）に、大宋山（だいそうざん）欣勝寺があります。宝物（ほうもつ）に大蛇の頭があり、かんぱつの時には、霊験（れいげん）あらたかといわれています。

今から約八百八十年ほど前、大徳絶海上人（だいたくぜつかいしようにん）がこの寺に住んでおられました。国内にも知られた慈悲深い（じひぶかい）僧で、徳をしたって、遠く京都や奈良からも、教えをこう善男善女（ぜんなんぜんによ）が後を絶ちませんでした。



それは、ある八月の雨の夜のことでした。

上人の居間先（いまさき）に人の気配がして、年のころ、十七、十八才の一人の娘が裸足（はだし）で立っていました。

上人は、これは人間ではない、きっと、けもの化身（けしん）にちがいないと見やぶられ、その夜は、そのままにうちずておかれました。ところがその娘は、その後七日の間、時間はきまって午前一時ごろ同じ姿で庭先に立ち、かすかにすすり泣き、上人に何かを訴え（うったえ）たい様子でした。



上人は、その娘の根気（こんき）に負け、七日目に自分の居間に通し、毎夜、庭先にたたずんでいたわけを聞きました。その娘は、上人の前で顔を伏せ（ふせ）ながら、「毎夜、上人の徳をしたって庭先までできましたが、障子（しょうじ）一枚が気にかかり、どうしても開けることができません、上人よりお声のかかるのを待っていました。」

と失礼を詫び、両手を合わせ、上人を伏しおがみながら、さらに「わたしの名はきぬと申します。むかし、丹波（たんば）の山奥の農家に一人娘として生まれました。十七才になったとき、親が選んだ養子をむかえました。夫は両親が健在（けんざい）なうちには、大変まじめに家業（かぎょう）に励んで（はげんで）くれました。ところが、母が死に、父が亡くなると、身をもちくずし、外で遊んで、わたし以外の女の人と仲好くなり、おしまいには、田畑も売りとばし、家へも帰らなくなりました。人の話では、三田の田舎（いなか）に好きな女の人が出来たとのこと、あまりのしうちに腹を立て、怒り（いかり）ともだえに逆上（ぎゃくじょう）し、夫を探しに三田まで出てきましたわ、わかろうはずもなく、疲れ果てた末、道にまよって裏山に来ましたが、精も根もつき果てて裏谷の池に身を投げました。それからこのかた、しっと、怒り、くやしきの一念で、生きかわり、死にかわり、けもの（蛇）の世界に生を受け、夫をのろう気持と、わが身のはしたなさが入りみだれ、苦しみにたえかねています。どうかこの身をお助けいただきたく、先夜（せんや）からお居間先をさがしていました。」と涙ながらに一氣に語りました。

上人は、それを聞き、あわれと思われ、ねたみ心や腹立ち心が、そのような結果になったことを訓戒（くんかい）され、「わたしが悪かったと心の底から悔いなさい。」

と教えられました。その化身の娘は、身をもだえながら聞いていましたが、上人の説教（せつきょう）が終わると、「気分が落ちつきました。これでやっと成仏（じょうぶつ）できます。」と言って、上人に心から感謝し、山に帰っていきました。

翌日、上人が村人に命じて、裏山の谷深いところをさがさせますと、長さが九メートルもあろうかと思われる大蛇が安心しきったような様子で大往生（だいおおじょう）をとげていました。

そこで上人は、修行の僧と共に、ねんごろに読経（どきょう）して、遺体を山にうずめ、頭骨（とうこつ）はこの寺の宝物として長くとどめ、女のしっと心と男の浮気（うわき）心のいましめとして残すことになりました。



この頭は、その後欣勝寺が道元（どうげん）によって真言宗（しんごんしゅう）から今の曹洞宗（そうどうしゅう）に宗旨（しゅうし）がえした時も、天正（てんしょう）七年（千五百七十九年）、荒木村重（あらかむらしげ）と羽柴秀吉（はしばひでよし）の一戦で戦災にあい丸焼けになった時も、不思議に難をのがれ、唯一の宝物として、女心の悲しさを今日に伝えているわけです。